

夕闇に

滲み駈るか

花筵

爪の鉄鏝

乾き剥がるる

目録

鉄錆風味歪夢 獺奇編

五

ヒメフフウシ 六

前口上

初めにお断りさせて頂きたい。

ここに、光は無い。日だまりのような暖かさは無い。どの物語も暗く、侘びしく、情が無い。薄暗い、日陰の文学だ。

あなたが幸いにして希^け有^うな感性を有し、これらの朽ちた文章に親和性を感じたとしても、友人知人に紹介するのはお勧めしがたい。あまり趣味の良い小説ではないことを、努^{ゆめゆめ}々お忘れにならないで頂きたい。

かつて、この地上に一人の幻視者がいた。昭和初期に活躍した探偵小説作家、夢野久作。残された作品に描かれた狂気、猟奇、幻想、異常心理の数々は、未だに輝^{いろあ}き色褪^あせない。

その夢野久作のファンサイト『夢のQ・サクッ!』¹にて猟奇歌が掲示板『サクッ!』と猟奇歌²を通じて募集され始めたのは、平成十二年九

月のことだった。

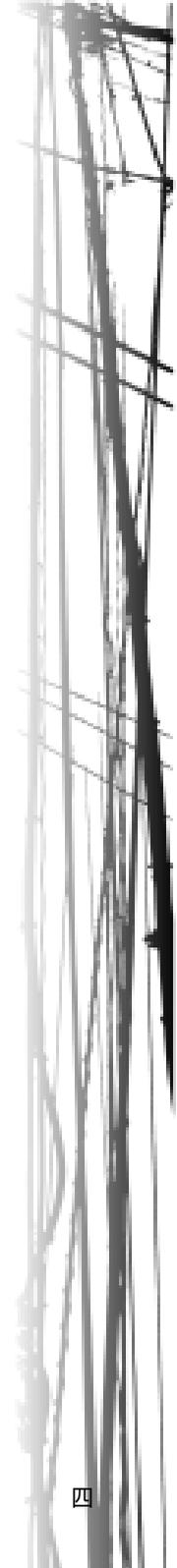
猟奇歌、それはかつて『探偵趣味』『猟奇』『ぶるぶる』の三誌に断続的に発表された、狂気や異常心理を主題とした短歌である。かつて『ぶるぶる』誌では、猟奇歌を文学ジャンルのひとつとして育てようという意図があったのか、読者からの投稿作品が掲載されることもあった。しかし夢野の夢幻と残酷を上回る作品が集まることはなかったとい²う。

私が右記サイトに創作猟奇歌を投稿した当初は、夢野と同じように短歌形式で投稿していた。しかし、自分の想念を定型に煮詰める作業にやがて疲れを覚えるようになった。代わりに始めたのが、ショートショートと呼ばれる原稿用紙で数枚程度の形式だった。掌編集『鉄錆風味至夢』と題して自サイトで月一連載を続け、平成二十年に百話完結を迎えた。

² 参考文献『夢野久作全集3』ちくま文庫

³ <http://longfish.cute.coocan.jp/>

¹ <http://yume9.hp.infoseek.co.jp/>



猟奇編には、実話怪談に味わいが近いもの、すなわち恐怖や残酷さが強く感じられる作品を主に集めた。

なお、寂滅編のほうは幻想や哀感の強い作品を収めている。どちらにも選んでいない話は、ウェブ上の『鉄錆風味歪夢』から読むことができ。各話は独立しており、どのような順番で読んで頂いても支障はない。それではしばし、歪んだ夢にお付き合い頂きたい。豊穣なる恐怖の収穫に祝福あれ。

平成二十年十一月九日

小田牧央



鉄錆風味歪夢
〈猟奇編〉

ビビブブウン

遊歩道の緑がキラキラして、木陰にいとシンと涼しくて、それから五月晴れっていうんだ、気持ちが良いウキウキして、息を深く吸い込むと胸の奥がスーッと元気が湧いて、どんどん歩いてしまう。

まぶしい。青空に浮かぶ雲がくつきりと白くて立体的で、いくつも組みあわさって重なりあってパノラマみたいに広がって、心が遠くに吸い込まれてく。きつと今日は、お日様が沈まない、もう夕暮れなんて来ない。ずつとずつと永遠にこんな昼下がりが続くんだ。そんなメルヘンなこと考えたりする。

だから、眠くなった。すつごく遠回りしてアパートに帰って、汗かいたからシャワー浴びてラフな服に着替えて、ノートパソコン膝にのせてメールチェックしてネット眺めてたら、なんだか凄く眠くなってきた。頭がポワーッと成って、畳の上に仰向けに寝転んで、ぼんやり天井眺め

てた。

大学に受かって、春に越してきたばかり。一人暮らしのこの部屋、最初はとまどったけど、だんだん慣れてきた。落ち着ける場所になった。ここは自分の巣なんだって、やっと実感湧いてきた。こわいこともあつたけど、大丈夫、きつとつまくやつてける。

目を閉じる。とろんって、なつた。窓から射し込む陽の光が膝の下にあたつてのがわかる。日陰のそこは肌寒いのに、足下だけ暖かい。素敵。ホントに素敵な日。

——話し声で、目が覚めた。

タケコさんだ。

ああ、すごく幸せそうに笑ってる。表の通りから聞こえてくる。

こわい。あの人、こわい。

タケコさんが誰なのか、私は知らない。ただの他人。すれ違うだけの人。大きな声で、楽しそうに携帯電話で誰かとおしゃべりしながらアパートの前を通り過ぎる、ただそれだけの人。いつも夜、二階にいる私の部屋まで話し声が聞こえてくる。聞くつもりはないけど、布団の中でうつらうつらしていると途切れ途切れに聞いてしまう。タケコさんという名前もおしゃべりから漏れ聞こえただけ。面と向かって話したことはない。

でも、見てしまった。あの晩、私は少し疲れてたと思う。いつもなら気にならないタケコさんのおしゃべりが、どうしても気になった。いつもいつもどつして夜中にそんな大きな声で話してるの、ここは住宅街なんです迷惑だと思いませんか。そういうことを一度きちんと言っただけないとダメだと思った。いつもの私は凄く寝付きがいいし物音も気にならない。何度が興味半分で窓を細く開けて、タケコさんがどんな人なのか覗いたことがあった。スーツ姿で、黒い髪が肩胛骨の下くらいまであって、おしとやかなお嬢さんっぽい人だったからビックリした。色白で、おしゃべりしてる顔が凄く幸せそうで、だから声は少し大きいけど許してあげてもいいかななんて思ってた。

それなのにあの夜は変だった。私はなかなか寝付けなくて、やっと頭がボーッとしてきたかなと思っただけならタケコさんの声に起こされた。凄くカッとなって起き上って明かりを点けた。カーテンを思いっきり引いて窓を開けて、大声だしてやれって深く息を吸った。

そして、私は見た。

それまで、外灯とか、近所の家の門灯でしか、タケコさんを見たことなかった。だから、気付かなかった。あると思っただけのもの、無いなんて、思いもしなかった。

あの顔、立ち止まって、大きく臉を広げて、こつちを見上げた顔。暗

闇に浮かび上った白い顔。

タケコさんは、左手を顔の横に添えていた。

なにも握っていない左手を。

空っぽの手。指先を、まるで透明な携帯電話を握ってるみたいに曲げてた。

胸の中で膨らんでた言葉が、どっかに消えてく。シューッと、しばらく。窓を閉めた。カーテンを引いた。うずくまって、肩がガタガタ震えてくるの必死にこらえた。

あの夜から、私はタケコさんを目にしてない。相変わらず、真夜中になるとタケコさんは「携帯電話で」幸せそうにおしゃべりしながらアパートの前を通り過ぎる。でも、私は絶対に覗かない。きつと見間違いだっただけ、本当はちゃんと持ってたんだって思いたいけど、こわくて外を見れない。

——表からの話し声が近付いてくる。畳の上に寝転んで目を閉じたまま、私はどうしてこんな時間にタケコさんが来るのか考えてた。いつも夜にしか来なかったのに、どうして今日はこんな時間なんだろう。ガラツと窓の開く音がした。隣の部屋だ。思わずハツとなった。隣の青山さんとは顔なじみだ。ショートカットの青山さんは、私と大学は同じだけど学部が違って理系でちょっとかっこいいボーイッシュな感じの人で、

ときどき立ち話したり実家から仕送りがあるとお裾分けしあったりして
る。私と同じでやつぱりタケコさんのおしゃべりが気になるみたいで
この間もブンブン怒りながら青山さんは「無神経な人、きらい。チイ
ちゃんもイヤでしょ？ 一緒にコラァッて叱ろうよ」なんて話してた。

そのことを思いだして、まさかと思つてたら青山さんの声がした。凄
い勢いで怒りの弾丸がビヨンビヨン飛んでく。びっくりした。いつもな
らクールで大人びた感じなのに人が違つたみたいにかわい声してる。汚
い言葉をいくつも使つて狂つたみたいにかわい声して空気がヒリヒリ震えて
叱られてるの私じゃないのに泣きたくなつてきた。あれは本当に青山さ
んなの？ 誰か声のそっくり同じ人がいるの？

急に、静かになつた。
なにも聞こえなくなつた。

青山さんの声もタケコさんの声も聞こえない。

小さく、足音が聞こえた。タケコさんのハイヒールの音。よかつた
いなくなつてくれるんだ。あれ、でも、なんだか聞こえ方が違つ。方向
が違つ。そつちは、路地のほう。このアパートの階段がある路地のほう。
カン、カン、とリズムカルな音が聞こえてきた。外付けの階段を上る
音。少し早足。怒つてみたいいな早足。次は通路。カッ、カッ。カッ、
カッ。ハイヒールが音を立てて私の部屋の前を通り過ぎてく。歩調を緩

めず、リズムカルに、誰にも止められない津波みたいに。そして、ス
トップ。青山さんの部屋の前で停止。

こわい気持ち、ざわざわ、お腹の底から胸元に這い上つてくる。
ピンポン。玄関チャイムの音。ダン、ダン、青山さんが部屋を横切
る足音。やめて、やめてやめて！ ドアを開けちゃダメ、タケコさんと
会っちゃダメ！

そのときになつて気付いた。

脛が開かない。

頭を持ち上げようとしたり。でも首が動かない。あれ、と思つて指先に
力を込めてみる。膝を曲げようとしてみる。でもダメ、麻痺したみたい
に感覚がない。自分の身体じゃないみたい。金縛りだ。

ウソ、どうして。焦る私の耳に、ドアの開く音が飛び込んでくる。爆
発したみたいに、罵りあう声があった。凄いい勢いでキチガイとか死ねとか
イヤな言葉が響いてくる。早く起きて二人をとめないで。でも脛が開か
ない。焦れば焦るほど身体の内側と外側が離れてく。

ドン、と強い音がした。壁になにかぶつかった音。続けて部屋の奥へ
踏み込む足音、ダダン、と強い振動。甲高い悲鳴があった。ガシャンとな
にか割れた。ケダモノみたいな呻き声、激しく暴れる音。

声がやんだ。

物音もしなくなつた。

凄く静かな、静かな時間。起き上ることをあきらめて、耳をそばだてる。じつと集中する。青山さん、どうしたの？ どうなつたの？

衣擦れが、聞こえた気がした。人の気配。動く人の気配。足音。凄く小さな、ゆっくりとした足音。これは青山さん？ それとも、タケコさんのハイヒール？ 通路を、誰かが近付いてくる。ゆっくり、ゆっくり、足音を忍ばせて近付いてくる。

額を汗が流れてく。私は喉の奥に力を込める。助けて！ 動かない唇。こんなに心臓は動いているのに！ こんなに早く鼓動してるのに！

ピン、ポーン。

玄関チャイムの音に、私は跳ね起きた。

金縛りが解けた。

六畳間、上半身を起こした私、夕間に塗りつぶされた暗い部屋。

夢？ 夢だつたの？

フラフラと頭を揺らしながら、畳に手をつけて起き上る。薄闇に包まれて輪郭が曖昧。ああ、そうだよ、タケコさんが昼に来るわけないじゃない。私、寝ちゃつたんだ。眠ってる間に日が暮れて、タケコさんが来て……それで？

ピン、ポーン。二回目のチャイム。私はキッチンを通り過ぎる。ク

リーム色の玄関扉。そうだ、青山さんが窓を開けて、タケコさんを怒鳴って、やだなあ、変に刺激しちゃダメだよ。逆恨みされたりしたらイヤじゃない。だから、あんなこと……。

あんなことって？

立ち止まる。ドアノブに差し伸ばした腕を、とめる。あんなことって？ タケコさんが来て、タケコさんが階段を、タケコさんが青山さんの部屋で。

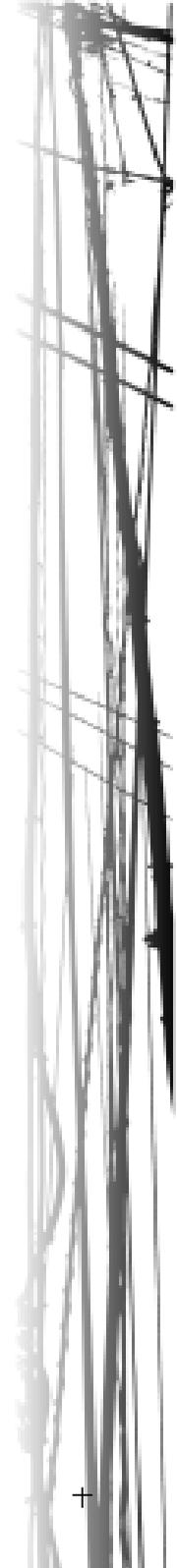
ピンポーン、ピンポーン、ピンポピンポピンピピンピ……連打されるチャイム。一步、後ずさる。頭の中でなにか回転してる。頭の中で回転するなにかが私を後ろに引きずる。ダメだ、ダメだ、早く逃げよう！ ダン、と叩く音。玄関扉を向こう側から叩く音。ダン、ダン、ダン。何度も拳を打ちつける音。

「チイちゃん！」

青山さんの声。

「寝てるの？ チイちゃん！ 早く、大変なの！ タケコさんとケンカになつたの！ あの人、火をつけたの！ 私の部屋に火をつけたのよ！ 早く逃げないと！ チイちゃん！ チイちゃん！」

胸から重い空気が逃げてくのわかつた。青山さんだ。青山さんだ。よかつた。ホントによかつた。泣きだしそつになりながら私は腕を伸ばす。



ドアノプのつまみをまわして、カチャンと音を立てながら鍵を外す。ドアを開ける。

微笑む顔があつた。薄暗がり、タケコさんが立ってた。白い頬が血飛沫ちしぶきで濡れてる。

「チイちゃん！ チイちゃん！」

左手。顔の横にかざした左手。空っぽの左手がビビブウンと振動して、青山さんの声を発した。

了

鉄錆風味歪夢 獵奇編

平成二十年十一月九日 初版 発行

著 者 小 田 牧 央
印刷・製本 コミックモール